人

内田作品ゆかりの人々

作家 柄刀一氏

——今回は柄刀一氏にお話を伺います。まずは内田康夫という作家への思いや、記憶に残っている出来事・エピソードがあれば教えてください。

札幌でお目にかかり、私が〈前世探偵〉というアイデアを話した時、内田さんは目を輝かせ、「面白い！」を連発されました。創作者として、思い切ったスタイルでも書いてみたいのではないかと感じたものです。しかし内田さんは、もちろん大前提としてご自身でも楽しまれたからこそではありますが、ファンと出版社のためにも浅見ものを書き続けたのでしょう。そして、そうした〝内田康夫〟であったことに微塵の後悔もないのだろうと思います。

——コラボレーション企画〝浅見光彦vs.天地龍之介〟を執筆するにあたって、一番たいへんだったことは何でしょうか？

それはなんといっても、何万人もの熱烈な浅見ファンの審判を受けるというプレッシャーです。ただ、感性的には浅見光彦というキャラクターは書きやすく、彼に活躍してもらうのは楽しい作業でした。二人の探偵の、解決へのアプローチの仕方にはある程度の差や特徴が出るように気をつかいましたね。

——浅見光彦と天地龍之介の似ているところと違うところは？

似ているところは作中でたっぷり語っていますから、それをお楽しみに。登場人物たちがガールズトークで盛りあがったりもします。違いは、龍之介は肉親の縁が薄いという点でしょうか。両親は早くに没し、育ての親といえる祖父も喪っています。ですから従兄弟の光章との絆は大事で、龍之介は本能的に、出会った人たちと身内のように向き合おうとしているのかもしれません。

——〝浅見光彦vs.天地龍之介〟の第二弾はありますか？

これは皆様次第です（笑）。なぜなら、第一弾の売りあげがオトナの方々の意向を左右するからです。案としては、『流星のソード（仮）』というタイトルで、北海道を舞台にしようか、と。浅見は、小樽、函館、洞爺湖などを回る。今度は陽一郎さんも出突っ張りの予定。形になるためには皆様の応援がぜひとも必要です！

——最後に内田康夫ファンへ、メッセージをお願い致します。

皆様にはそれぞれの浅見光彦像があると思います。今回のはいうまでもなく、私の個人的な、そしてこの作品の範囲内だけでの浅見光彦です。内田康夫氏が残念ながらお亡くなりになってしまい、もう本物の浅見光彦は新たには登場しません。ですので、真の浅見作品から受け取った私の心の中で生じた『ミダスの河』が、皆様の浅見光彦世界への助走路か実験台になってくれればと思います。今作には、歴史的な秘宝のロマンも感じていただければなによりです。

つかとう　はじめ：作家。1959年北海道生まれ。1998年に『3000年の密室』でデビュー。主な著書に、龍之介シリーズの他、『猫の時間』、『月食館の朝と夜　奇蹟審問官アーサー』などがある。

内田康夫財団公認

ミダスの河

名探偵・浅見光彦 vs. 天才・天地龍之介

黄金に染まった車中で起こった殺人。背後に浮上する信玄の埋蔵金伝説。
事件の鍵を握る、武田家の金山奉行を務めた謎の名家に隠された秘密とは？
二人の名探偵が奇跡の競演！大注目の傑作ミステリー誕生！

柄刀一・著　本体1,900円＋税

祥伝社